

## 目次

序 『源氏物語』の伺候者への視座……………	11
序章 研究の目的と研究史上における位置づけ……………	13
はじめに……………	13
一 本書の目的……………	14
二 問題の所在……………	15
三 先行研究を踏まえた問題意識……………	17
四 研究史とそこから見えてくる課題……………	19
五 研究史上における本書の位置づけ……………	23
六 伺候者の定義……………	25
七 歴史の実態との関係……………	30
八 〈読み〉の実践としての物語本文……………	32

第一部 『源氏物語』の伺候者に関する「表現」と〈概念〉…………… 39

第一章 「従者」と〈男性従者〉…………… 41

はじめに…………… 41

一 平安かな散文における「従者」…………… 41

二 公卿日記における「従者」…………… 44

三 『源氏物語』における「従者」…………… 46

おわりに…………… 49

第二章 「乳母子」と〈乳母の子〉…………… 53

はじめに…………… 53

一 問題の所在…………… 54

二 「乳母子」と〈乳母の子〉への語りと読み…………… 56

三 「手引き」から見る「乳母子」と〈乳母の子〉…………… 66

おわりに…………… 71

第三章 「めしうど」と〈お手つきの侍女〉…………… 77

はじめに…………… 77

一	問題の所在	78
二	「めしうど」と名のある侍女たち	80
三	「めしうどだつ」侍女たち	88
	おわりに	96
第二部 『源氏物語』の男性伺候者たち		
第四章 男性伺候者体系論序説		
	はじめに	105
一	主人の実名を語らないこと	106
二	伺候者の実名を語ることに	107
	おわりに	112
第五章 小君の手引きと光源氏——『源氏物語』における私的主従関係形成の語り——		
	はじめに	115
一	小君の呼称からみる光源氏との距離感	117
二	「子」から「小君」への変貌	120

三	光源氏の言動「まつはす」と「あこ」	125
四	手引きから排除された空蟬の侍女	128
	おわりに	130
第六章 右近の将監の官職変化と光源氏——主人の政治的立場の象徴——		
	はじめに	135
一	右近の将監の特殊性	136
二	右近の将監の形象	142
三	須磨退去をめぐる右近の将監の役割	146
	おわりに	153
第七章 伊予の介と大和の守——公卿と受領の私的主従関係——		
	はじめに	159
一	『源氏物語』の受領	159
二	「すすくしき」伊予の介	165
三	大和の守と夕霧	171
四	「大和の守」という呼称	181

おわりにに	183
第八章 受領になった良清と惟光―近江の守と摂津の守で退場する意味―	191
はじめに	191
一 良清と惟光の最後の登場場面	193
二 近江の守としての良清	196
三 摂津の守としての惟光	199
おわりに	204
第九章 受領がもたらす都と鄙―『源氏物語』の「るなかぶ」美質―	209
はじめに	209
一 「都意識」と「雑意識」の発露	211
二 「ひな」から「るなか」へ	213
三 大夫の監の「鄙意識／都意識」の発露	215
四 大宰の少弐の都意識	217
五 西の京の乳母の都意識	218
六 玉鬘の「るなかぶ」美質	221

七	常陸の介の「ひなぶ」野鄙と浮舟の「ゐなかぶ」美質	225
	おわりに	228
第十章	主従の和歌空間——男性伺候者が和歌を詠むことの物語の意味——	231
	はじめに	231
一	主従唱和歌による異郷の時空の形成	232
二	主従唱和歌の官職名称による現実回帰	240
三	右近の将監と光源氏の贈答歌	242
四	惟光と光源氏の贈答歌	246
	おわりに	251
第十一章	惟光の退場と光源氏の死——乳母の子と葬送——	257
	はじめに	257
一	夕顔巻と惟光	258
二	〈乳母の子〉の惟光と大徳	259
三	男性の〈乳母の子〉と葬送	262
四	「誄」による主人の鎮魂	270
五	「乳母子」と語られる男性伺候者	273

第三部 『源氏物語』の女性伺候者たち	283
第十二章 『源氏物語』の男性伺候者と女性伺候者の「世」と「心」	285
はじめに	285
一 「世に従ふ心」と男性伺候者たちの葛藤	286
二 「まかりあくがる」侍従の葛藤	289
三 「まかで散らぬ」女性伺候者たちの葛藤	293
四 伺候者たちの動向を語ることの意味	297
おわりに	300
第十三章 手引きする侍女たち	305
はじめに	305
一 『源氏物語』の手引きとその表現	306
七 夕顔で語られる二人の〈乳母の子〉	276
六 惟光を「乳母子」〈乳母の子〉と語らないこと	275
おわりに	279

二 男君の「責む」行為の意味	309
三 救済としての「手引き」	315
おわりに	319
第十四章 柏木の「語らひ人」小侍従	323
はじめに	323
一 小侍従の登場	324
二 小侍従と柏木の「語らひ」が拓く物語	327
三 小侍従と柏木の「語らひ」から手引きへ	331
おわりに	338
附 主要伺候者と主人一覧表	343
初出一覧	351
あとがき	353

## 凡 例

一 『源氏物語』の本文引用は、大島本（『大島本 源氏物語』、角川書店、一九九六年）に依り、心内表現は（へ）、発話表現は「」、補入は（ ）、ミセケチは取消線、句読点、濁点は適宜付し、私に改めた箇所は傍記を施し、補助理解のため主語や人物名を（ ）で示した。また、引用本文後の（ ）内には巻名、丁数並びにオ（表）、ウ（裏）、／以下に新編日本古典文学全集（小学館）の該当する最初の頁数を記した。なお、直前の文章で引用した巻と同じ場合には、巻名を省略し「同」とし丁数のみ示した。ただし、巻名と丁数が直前引用文と同じ場合には、巻名丁数を省略し「同」とし頁数のみ示した。大島本の欠巻、「浮舟」巻は、明融本（『源氏物語（明融本）Ⅱ』東海大学蔵 桃園文庫影印叢書 第二巻、東海大学出版会、一九九〇年）に依って、大島本同様の本文表記とした。

一 『源氏物語』以外の本文引用は、『うつほ物語』（室城秀之『新版うつほ物語』一～六、角川ソフィア文庫、二〇二二（二〇二四年））、『枕草子』（河添房江、津島知明『新訂 枕草子』上・下、角川ソフィア文庫、二〇二四年）とし、その他の作品は新編日本古典文学全集とした。それ以外については適宜示すこととした。

一 『源氏物語』の古注釈書引用は、『河海抄』（角川書店、一九六八年）、『花鳥余情』『源語秘訣』『岷江入楚』は源氏物語古注釈叢刊（武蔵野書院）、『一葉抄』『弄花抄』『細流抄』『孟津抄』は源氏物語古注集成（桜楓社）、『湖月抄』は講談社学術文庫、『源氏物語玉の小櫛』は『本居宣長全集』第四巻、（筑摩書房）により、引用後（ ）内に頁数を示した。その他の古注釈書については、適宜示した。

一 『御堂閔白記』は大日本古記録（岩波書店）、『小右記』は増補史料大成（臨川書店）、『左経記』は増補史料大成（臨川書店）、割注は（ 〉）で示した。

一 論文の引用に際しては、最新の収載を基本とし、初出時の情報については原則省略した。また、編者が複数の場合、省略して明記しないこともある。

## 序章 研究の目的と研究史上における位置づけ

### はじめに

本書は、『源氏物語』における主従関係に注目し、貴人に「仕える者たち」の視点から物語を読み解くことで、〈読み〉の可能性を拓けようとする試みである。ここでの貴人とは、天皇や中宮・女御・更衣などの后、親王・内親王を含む皇族や三位以上の上級貴族を指し、「仕える者たち」とは一般的に侍女や男性従者と呼ばれる者たちを指す。『源氏物語』で語られる侍女、男性従者の多くは、四位五位の中級貴族の子女たちである。<sup>(1)</sup>たとえば、末摘花の侍女、大輔の命婦は兵部の大輔（従五位下相当）の娘、夕顔の乳母は大宰の少弐（従五位下相当）の妻で、その子どもの兵部の君（幼名、あてき）は玉鬘の侍女として、豊後の介は玉鬘の家司として仕える。玉鬘の侍女には宰相（正四位下相当）の娘の宰相の君という侍女もいる。また、光源氏の乳母の子で従者の惟光は大宰の大弐（従四位下相当）の息子、同じく光源氏の従者の良清は播磨の守（従五位上相当）の息子である。須磨退去を契機に光源氏の従者の一員となった右近の将監は、伊予の介（従六位上相当）の息子である。

主従関係で言えば、物語の中心人物は主人たちであり、「仕える者たち」である従者は脇役、端役と呼ばれるもの

の、独立した個人として語られ、彼らなしでは主人の恋愛や物語展開が不可能なくらいの働きが語られている。たとえば、光源氏と夕顔の恋愛譚では、惟光（光源氏の男性従者）の活躍と右近（夕顔の侍女）の存在は、恋愛と後日譚を展開させる存在として欠かすことができない。また、柏木と女三の宮の恋愛譚には小侍従（女三の宮の侍女）の手引きによって密通が実現する。そして、弁の君（柏木の乳母の子）は、柏木の死後に八の宮家の侍女として出仕して、たことで、薫に出生の秘密を伝達するなど男君と女君の関係形成には不可欠な存在である。

このように、侍女や男性従者は主人同士だけでなく、物語空間を繋ぐ重要な役割を担っている。特に侍女については、女主人との距離の近さゆえ、物語の視点や語りの側面から一定の評価がなされ「女房論」という術語が定着し、着実に研究成果が積み上げられている<sup>(2)</sup>。ここで、「仕える者たち」という枠組みで考えた際、男性従者の研究は、発展途上にあると言わざるを得ない。そこで、本書はこれまで蓄積されてきた女房研究の成果を踏襲しながら、男性従者に関する研究の底上げと発展を図ることをねらいとする。

## 一 本書の目的

本書のタイトル「伺候者」という用語について、これまでの源氏物語研究においては、中級貴族出身の侍女や男性従者といった「仕える者たち」を一括して指す用語が存在しなかった。近いものとして「受領層」が挙げられるが、全員が男性従者や侍女として仕えるわけではない。そこで、「藤壺<sup>二</sup>」近うさぶらひつる命婦、弁<sup>一</sup>（「賢木」二三ウ／一〇八頁）や「源少納言（＝良清）（光源氏二）さぶらひ給はば」（「明石」八ウ／二三〇頁）などのように、侍女や男性従者が特定の人物を主人として「さぶらふ」ことに注目し、主従関係の「従」として語られる人物たちを総称する用語として「伺候者」を用いる。

この用語には、性別に関係なく、特定の「主人」に「仕える者」という観点を含んでいる（主人が複数存在する場合もある）。つまり、「伺候者」とは、物語内の「主従関係」がどのように有機的な繋がりを形成し、意味をなしているのかを明らかにするための用語である。従来の脇役論や端役論といった枠組みでは見えにくかった「仕える者」としての側面を、「主従関係」を中心とした「伺候者論」として捉え直すことで、主人と従者によって紡ぎ出される物語の意味を体系的に整理し、『源氏物語』で語られる「主従関係」を中心とした〈読み〉の実践を展開していく。

「伺候者」という新しい用語を導入することで、主従関係の〈読み〉が複雑化する可能性も考えられる。しかし、物語世界において「従」がいかに「主」の人物像と〈読み〉を支え、物語空間を広げる存在であるのかを巨視的に捉えることを本書では目指したい。当然ながら、女性伺候者と男性伺候者では、職掌、出仕方法、公私の区別、出自、身分などを含め主人との関係は一樣ではない。そのため、こうした点は個々の主従関係の〈読み〉へと還元し、男女の「伺候者」の違いも相対的に捉えていく。

## 二 問題の所在

侍女や男性従者といった研究分野は、歴史学とも接点があるため、文学用語として使用する際に問題を孕むことがある。そこで、研究史を確認しながら、実体を指す用語と学術的に用いられる概念の整理を行いたい。

まず、侍女と女房について少し触れておきたい。侍女とは、天皇・院宮・親王・内親王・女御・更衣などの宮中や公卿など貴人の邸宅へ出仕する女性を指し、上級の女房から下級の女官・女童・下女までの出仕女性全般を含む。一方、女房は、出仕先に居住空間である「局」を与えられた上級侍女を意味する。本書では、この原則に従って用語を使い分けることで、「仕える者たち」について意識を向けていきたい。文学研究においては、侍女≠女房という認識